

福音のヒント 受難の主日 (2017/4/9 マタイ 27章 11-54節)

教会暦と聖書の流れ

教会の暦では、きょうから始まる聖週間のうち、聖木曜日・主の晩さんの夕べのミサから復活の主日までを「聖なる過越の三日間」と呼び、年に一度、特別に3日間かけて、キリストの受難・死から復活のいのちへの移行、すなわち「過越(すぎこし)=パスカ」を記念します。この中の聖金曜日の典礼で、毎年ヨハネ福音書からの受難朗読が行われます。一方、主日のミサのサイクルでも、キリストの生涯の主な出来事を記念していくので、復活の主日の直前の日曜日に、イエスの受難を記念することになっています。これが受難の主日です。受難の主日には3年周期でマタイ、マルコ、ルカ福音書からの受難朗読が行われます(今年はマタイで、長い形としてマタイ26章14節～27章66節を読むこともできます)。なお、この日のミサの開祭の部分で枝を用いて「主のエルサレム入城」が記念されます。

福音のヒント

(1) マタイ福音書の受難物語は、マルコ福音書の受難物語を基にしている、それにいくつかの独自の伝承を加えています。この箇所では、マタイが付け加えた伝承は、19節のピラトの妻からの伝言、24-25節のピラトと民衆のやりとり、さらに51-53節で神殿の垂れ幕が裂けた後の出来事です。19、24-25節では、イエスが無罪であること、イエスの死の責任はローマ人であるピラトにではなく、むしろユダヤ人にあることが強調されているようです。そこには、マタイ福音書が書かれたころのキリスト教とユダヤ教との対立、ローマ帝国によるキリスト教への迫害などの事情が反映しているのかもしれませんが(ローマ帝国と敵対しない配慮が必要だったのでしょう)。



なお、イエスの裁判はイエスの殺害を正当化するために行われたもので、裁判からは「イエスがなぜ死刑にならなければならなかったか」は見えてきません。イエスは裁判で自分を神の子であると言ったから死に定められたのではなく、イエスのこれまでの活動とメッセージ全体が当時のユダヤ人指導者たちの目に危険なものと映ったから死に追いやられていったのです(51-53節については後で述べます)。

(2) 40-43節で十字架につけられたイエスをののしる人々の言葉「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い」「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから」は、マルコ福音書よりもくわしくなっています。この言葉は、イエスの宣教活動に先立つ荒れ野での悪魔の誘惑を思い出させます。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が

石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある」(マタイ4章6節)。

自分の身を守る(自分を救う)ことは一般的には悪いことではないはずですが、ここで問題なのは、それがこの場合には人を神から引き離す誘惑であるからです。荒野でイエスは自分を神から引き離す誘惑を拒否しました。最後の苦しみの中でも同じようにしたのです。ただ「悪いことをするかしないか」という面だけで誘惑を考えるのではなく、「わたしたちを神から引き離そうとするものは何か」と考えると、自分の問題としての誘惑が見えてくるのではないのでしょうか。

(3) イエスをののしった人々のこの言葉はまた、詩編22編をも思い出させます。「主に頼んで救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら／助けてくださるだろう。」(詩編22編9節) マタイの受難物語の背景には、この詩編があります(マルコも同じですが)。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」は詩編22の冒頭の言葉です。「くじを引いてその服を分け合い」(マタイ27章35節)は、詩編22編18-19節「骨が数えられる程になったわたしのからだを／彼らはさらしものにして眺め わたしの着物を分け／衣を取ろうとしてくじを引く」を思い出させます。

詩編22は苦みのどん底からの祈りですが、単に苦みの叫びでは終わりません。苦みの中からの祈りは、次第に賛美と感謝に変わっていきます。それは「主は貧しい人の苦しみを／決して侮(あなど)らず、さげすまれません。御顔(みかお)を隠すことなく／助けを求める叫びを聞いてくださいます」(25節)と確信しているからです。この詩編はイエスの時代まで、何世代にも渡って苦みのどん底にいる人々によって歌い継がれ、イエスの後にも、多くの人がこの詩を自分の祈りとして歌い続けてきました。イエスもまたその人々の一員になったとすることができるのでしょ

う。マタイは、イエスの十字架を神からも見捨てられたような悲惨な死であるというだけでなく、そこに、徹底して苦しむすべての人とのつながりを生き、同時に神に従って生きる姿を見えています。苦しみの中にあるときに、神から離れ、人からも孤立してしまうのか、それとも、苦しみの中で、神につながり、人とつながって生きるのか、それはわたしたちにとっても大切なテーマなのではないのでしょうか。

(4) 51節の「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け」はマルコ福音書も伝える出来事で、神と人との間を隔てているものが取り払われることを暗示しています。51節後半-53節「地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていて多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」は、マタイ福音書だけが伝える不思議な話です。この出来事が指し示しているのは、イエスの復活がイエス個人だけに意味のあることではなかったということでしょう。イエスの受難だけでなく、イエスの復活にもすべての人との連帯性があるのです。復活とは、神とのきずなの完成であり、同時に人とのきずなの完成です。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28章20節)と約束されるイエスは、わたしたちが死に臨むときも、さらに死を超えても、常に共にいてくださる方です。ここにわたしたちの希望の根拠があります。